

東の追分 : The East Fork

関宿は、江戸と京都を結ぶ東海道における公認の宿場のひとつとして栄えるより約千年も前の 8 世紀には、すでに交通の要衝となっていました。また、この町は京都・江戸と、最も古く格の高い霊場である伊勢神宮のある伊勢とをつないでいました。

伊勢へと向かう巡礼者たちは、町の大通りの東端にある分岐点「東の追分」まで行かなくてはなりません。そこから、おそらく 2、3 日かけ、伊勢別街道を南に向かって 60km 歩きました。現在は、伊勢神宮から寄贈された木造の鳥居が伊勢へと向かう道の入り口にまたがっています。伊勢神宮の神殿は、1690 年以來 20 年周期で建て替えられており（この慣習自体はさらに 1000 年前から続いています）、この鳥居は 2013 年の建替えの際に関宿に下賜されたものです。通常、取り壊された神殿の建築資材は伊勢神宮の他の 123 社で使われるため、関宿が千年以上にわたって神宮への巡礼者に寝食の場を提供してきた町の役目を認められ、この鳥居を賜ったのは、大変名誉なことでした。

江戸時代（1603-1867）、宗教的な場所への巡礼は、徳川幕府によって禁止されていなかった数少ない旅行形態のひとつでした。専門家によると、伊勢には年間数十万人以上の参拝客が訪れ、「御蔭年（lucky year）」にはその数はさらに数倍にもなったそうです。御蔭年にあたる 1830 年には、400～500 万人の巡礼者が伊勢を訪れたと推定されています。その全員が関宿を通過したわけではありませんが、この数字からは、交通の要衝としての関宿の重要性がうかがえます。